

■ つなぎ話に見られた連想の特徴 ■

教材 月の世界（つなぎ話）

「あと十分で、月に着きます。どなた様も、うちゅうふくを着てください。あと九分五十秒ですよ。」
 という、ロケットのガイドさんの声がマイクから聞えてきた。
 水も空気もない、月の世界。昼はものすごく暑く、夜は、ものすごく寒い、月の世界。地球を出発するときに聞いた話を思い出すと、なんだか、こわいような気がする。
 ぼくたちは、急いで、うちゅうふくを着た。そして、空気のつまったポンベをせなかにつけた。（原まさる）
 ふわっと、ロケットが止まりました。ドアが開きました。わたしたちは、われがちにかいだんをおりて、月の地面をふみしめました。「ばんざい」と言っ、広行さんがとび上がりました。すると二メートルぐらい上がりました。
 月では、からだの重さが、地球にいるときの六分の一になると聞いたことを思い出しました。（森 町子）

■ 丹野しげ子

1、奇想天外性

予想として、次々と連想されてでてくるものが、月世界の冒険談として多分、アツといわせたり次はどうなるかという期待を持たせる話をするだろうと思いはしたが、それは予想を超えてはるかに奇抜であった。その一つとして、一つの事件が突如として持ち上がりまたあつてなく終わりをつけてそれがくりかえされていく。たとえば―ホテルが月に建てられる。ぶちこわされる。また建つ人が死ぬまた生きかえる。――のよう。

また、一つに、月世界の事件でありながら連想されるものが天国であったり地獄であったり宝くじであつたりしたことである。たくさんの美しく暖かな童話や物語・冒険物空想物など読む機会も多いだろうになぜこのように奇抜な感を受ける話が続けられてゆくのだろうか。

2、一大事性（生死）

人間にとって一大事であらうはずの「生きる 死ぬ」ということが何度でも何度もくりかえされている。これは、あわやその瀬戸ぎわにということがなくほとんどストリートに死に向かう。ただ死んでしまうのではなく思いもかけぬ方法で必ず地球上へもどってくる。死から生への転換の際、時には、「人生のやり直し」などということばまで添えて。

2、破壊と再現

「生死」の問題が引き出されてくること。また、1で述べたようにホテルが建つ、こわされるがくり返されることなどが、これらがつなぎ話をおもしろくする決め手のようなものと考えられ、話を進める際の一つの条件の様な位置を占めているように考えられる。すなわち、破壊することと再現することがつなぎ話の一つの要素である。

3、自らの世界への限定性

月の世界での出来ごとであるという意識は常にもちながらも、その世界でくりひろげられる物語の素材はなんと日常生活の中に見いだされる

対象—第三学年

使用教科書 日本書籍小学国語
「月の世界」（掲上）

教師の観察的観点

つなぎ話をする時に、子どもはどんな連想をするか。

○その仕組み発展性と構造

得られた概観的項目

奇想天外性

一大事性—破壊と再現

自らの限定性の反映であること

主人公への集約性

○その時間的順進性について

○つなぎことへの関心（ゲーム的）の強さ

○カッコいい終了への期待

〔附録〕

口述と筆記における連想の異同・その結果

ものが多いことか。生死、ボーイ、ホテル、月給、宝くじ、おみやげの紅白まんじゅうなど。また、子供たちが、空想したり、生活の遊びにはいつている、天国だとか怪獣だとか。両親や他の大人—大人の世界に住む人々—との接触、友人との間に強い関心を抱いて交換しあう知識、いわば生活の中にかいま見た秘密めいた世界のもの、遊びの中で盛んに用いられる話題を持ち出そうとしている。子供たちは月の世界を自らが住む世界に、自然におき換えてしまつてその中で、知恵をしぼつてその時々にあつたものを取り出そうとするところに立つて、初めて、話を構成しようとする意欲と満足を生むものなのである。

つなぎ話の素材が、子供たちの私たちの世界を地盤として出てくるならば、連想の特徴の1としてあげた「奇想天外性」はどうなるのだろうか。子供自身がとつびでもの珍しいなどと思ひながら話しているのだろうか。大人にとっては、予想外だ、変なことといひ出したものだなどと思われ、実際にそんなにとつびなことを話しているつもりもなく真剣に取り組んでいるように思われる。

4、主人公への集約性

次々とつなげていく際に、一番最初には地球からの旅行者たちから多分大勢が月に到着したと大多数納得のうえ、始められたのだが、すぐに主人公というかそれが一人にしばられてしまい、同主人公が大体話の中心となつてゆくのもおもしろい。

1、連想の時間的順進性

話を次々につないでゆくということは話がどんどん前進してゆくことと同じなのであるまいかというのは「月の世界」のつなぎ話において前にも少し述べたようにほとんどの話題がぐりかえされてゆく。目だつものの一つに地球と月という二地点間の往来はひんばんになされる。これは教科書の部分に、地球から月への旅行となつてゐるからそれが子供の頭から抜けないのもあろうが、宇宙の中の星で名前だけでも知つてゐるような金星や木星だといったようなもう一つ余分にいける場というものをつくらない。わき目もふらずに皆さんに月と地球を往き来する。またこの必ず月に話をかえすということホテルを建て直す土地を選ぶさい、初めてロケットが着陸した場に決める

るなど最初の印象—月世界へきた—が常にまつわりつき、話がどこか不特定の地のできごとのごとく感じられても決して月を忘れてはいないといえよう。子供たちにとっては、何度同じ話題がぐりかえされようとも、そのたびごとに、頭の中で話がゆきつもとどろつするわけではなくて常に話は前に進んでいると言える。話された事件は、どんな時間の中にすくいこまれてゆく。「月の世界」のつなぎ話では、時間的に後もどりするという例は一つも出てきていない。

2、つなぐことへの関心(ゲーム的)の強さ

つなぎ話の最中、ホテルがこわされたたり、人があつさり死ぬ目に会わされた時、ある子供たちはヒヤ—と言つて喜び、違う子供たちは「いいかげんにしろよ」と言い、いやがたりしたのとはなぜだろう。自分の頭の中に描きつみ上げられてきたものの上に立つた予想というか発展させようと思つてゐたものが打ちくだかれてしまひまた新たにつみ上げなければならぬためではなからうか。破壊を試みる子供も、それに対して再現を図る子供も、自らの描いてきたもののへびつたりとつないでゆきたいのだから。子供たちがうまく話をつ

なげたという時、それは前の人の話にうまい具合につなげたということではなく自分の描いてきた像にもうまくつなげたということのようだ。自分の像と話されているもののがうまいかないような時、いやだなあと思つたり、そこをなんとかつとりばやく消してしまふことはできないだろうかと考え、そこで「先生それは嘘だって言つてよ—」の聲がしたり「彼の言つたことは嘘で」と言つてから自分の話をつなげようとしていく。自分の像につなげようとしていくわけであるから、1にもどるが、やはり連想は前にも進み、話されたことはすべて過去になり今話されているのが一番新しい事件となる。

1、カッコイ終了への期待

連想が前にと進む時、つなぎ話の終わりはどう受けとめられてゆくのだろうか。いつまでも延々と話が続きそう、子供たちは「もう終わりにしよう」という。その場合、死というものが一つのピリオドに用いられたが—それでも満足できない子供は「モットカッコイオワリ」を欲求する。

以下当時の採録を掲げる。

口述によるつなぎ話

A(男)「あのね、ロケットの……あの
そしてね、ロケットのよびのさんそ
ポンペをとってきてね、そしてね、
流れ星が落ちてきてね、ロケットに
ぶつかって爆発してね、そしてね、
あのね、あの人間はね、探検しなが
らね、あのね、いつね、酸素ポンペ
の空気がなくなるかってね、心配し
ながらいた。」

B(男)「エートね、また、ロケットに
ね、鉄やいろんな物積んでね、また
ね、月にホテル作っただよね、それ
でね、地球に連絡してね、えーと地球
から月に、また、ホテルができたから
きてくださいたらある人がきたん
だよね、その人がとまりにきてね、
宝くじを引いたのね、あたった番号
はへのクサイヨでエート、への93
14というのよね、そのくじは一枚
もはいってないからね、その人何枚
引いてもあたらなかったからね、が
っかりした。」

C(男)「がっかりしたけど、一度は
首つりをして死のうかと思っただけ
そのロケットにのってきた人間に止
められてね、そのホテルのボーイに

やとわれたの。」

D(男)「ボーイにやとわれたけどボー
ナスはくれないし、月給は少ないし
やめようと思っただけ『お願いです
月給は値上がりしますから。』と言
いましたけど、えーと出ていってしま
いました。」

E(男)「だけど、ホテルの主任さん
がもう一度きてくれていってね。
初めての月給をもらったんだって
ね、それでおまんじゅうを買おうと
思った、それを落としちゃったんだ
って。」

C(男)「でもまた月給を減らされたか
ら、首つりをして死んじやっただけ
その人は生きてる間に悪いことをし
たから、地獄のえんま様にされた
んだってね、それでおまんじゅうを
買おうと思った、それを落としちゃ
ったんだって。」

C(男)「でもまた月給を減らされたか
ら、首つりをして死んじやっただけ
その人は生きてる間に悪いことをし
たから、地獄のえんま様にさんざん
いたためつけられた。」

F(男)「だけど、えんま様は帳面を
見たら、もう少し長かったから、ま
た地球に帰れることになったの。」
G(男)「ええとそれであの人はやっぱ
り月がすぎなので、月にいってホテ

ルにとまりました。だけどその人は
やっぱしいやだと思っただけです
いきたくてたまりませんでした。だ
からええと、だからボーイに頼まれ
ただけ月給はたったの三円でし
た。だからまた、どんどんためよう
と思っただけですけど全然たまらな
いので、うーんと一生かかって三十
円しかもらえませんでした。でも
また生きる薬を買ったので、あれは
たったの三十円でした。だから財産
がなくなっちゃってやつと生きか
えってまた働いていました。それで
どんどん働いているうちお金が三十
万となつてホテルの主人が『やとつ
てくれ』と頼んでました。だけど
いやだいやだといつたのでそのおや
じは死のうと思いましたが死にたく
ありませんでした。」

A(男)「そこにはね、たこ入道がい
てね、そしてね、そのホテルをぶつ
こわしちゃったのね。そしてね、ま
た探検に歩いていってね、そしてね、
うーん男の子が死んだの。」

声(流しちゃうえ つづける おわりにする)

B(男)「またね、ホテルを建て直して
ね、今度は地球へ連絡して、今度は
えーと一泊千円で、二泊になると二
泊で千五百円でするからって地球へ

ゆったから千人くらいお客がまし
た。その月のホテルにきました。」

H(男)「あんまりはいりすぎたのでホ
テルが、つぶれてしまいました。」

I(女)「あのね、つぶれちゃったので
みんなが帰ってってホテルがパーに
なつてしまいました。それでまた建
て直したが一人のお客もきません
でした。」

J(女)「おかげでホテルはつぶれま
せんでした。」

声(その方がいいぞ——)

K(女)「うーんとねー、だけどお客さ
んが一人もこなかったからね、そこ
運が悪い土地だと思つてちがう土地
に建てたの。」

声(あの、またつぶされるからやめろよ)

L(女)「あのね、そしたらね、今度は
ね、たこ入道とか変な怪じゅうばか
りきて困っちゃった。」

G(男)「それであんまりたこ入道みた
いのがいるからロケットのあった所
にホテルを建て直しました。そした
ら今度は人間がこないでオバケが出
てきてまた困つたので引き返してし
まいました。今度はたくさん人間が
出てきましたが……ホテルに泊まれ
ましたがうーんとボーイ不足で、うー

ん、あの主人がボーイをやって『こ
ら早く弁当持ってこい』『はいはい
ヘッヘ』『やいやいおふろわいてね
えぞ、やいやいこはんはまだか』そん
なことばっかり言って主人はぶっ倒
れてしまいました。そしたらお客の
人から水をかけられて……目をさま
したが、その後はお客が全然いない
で、お金も全部とられてしまいました
た。それからまたショボショボとい
きました。またお客がきてそれはす
ごいデブで百貫デブでした。それで
あんまり広い所がなかったので……
大広間に泊まらせました。その辺で

て急いで帰ってしまいました。それ
でショボショボとえんえん泣いてい
ましたが泣いてもお客さんがこな
ったのでとうとう思い切り泣いてし
まいました。そしたらドラネコがき
て泊めてくれとニャンニャン泣いて
いました。のらねこでもお客さんに
変わりがないからお客にして一番上
等の室にしてしまいました。のら猫
にペコ／＼さげましたがニヤ／＼
ばっかり言ってるので追い払ってし
まいました。」

（途中で、もつとマジメにやれよ、長
すぎるぞ、もうやめろの声しきり）

『めしもってこい』と言ったんだけど
ブタめしもってこい、ブタの丸焼き
はない。ブタがないので困ってしま
いました。それであの人がブタに似
ていたの、ブタひきにしようと思
ったけど、食べる人がないので、か
わりにブタの形をした（えーと）お

M 女「ホテルの主人はあんまり疲れ
たので、外を散歩することにしまし
た。すると大きな、洞くつがありま
した。」

わりには作って食べさしましたが、『こ
れはブタじゃねえぞ』と言って『そう
ブタブタいわねえでくれ』と言いま
した。けどもしようがなくて違
うのを作ってみたけどやっぱりブタじ
やないので怒ってあの主人をブタの
形にしてしまいました。それで自分
も食べようと思ったけど食べんのを
よして、『食べたくなえや』と言っ

N 男「また、宇宙グマがいておなか
がすいていたので、ぶっころして食
べてしまいました。」

声（エエッまた、そんなのやめろよ！
先生、それは嘘だって言つてよ！）

た人生のやり直しをしようと言っ
てまた地上に帰って行ってそれから神
様がおみやげに紅白まんじゅうをく
れました。それからそのおまんじゅ
うを売ってボーイを三人つれてきて

E 男「そして天国にいつてそしてま
た人生のやり直しをしようと言っ
てまた地上に帰って行ってそれから神
様がおみやげに紅白まんじゅうをく
れました。それからそのおまんじゅ
うを売ってボーイを三人つれてきて

ホテルを経営したんだけどそれもぶ
つつぶれてしまいました。（月にかえ
ったの？）月。それで終わり。」

声（オワリにしようよ！
もつとカツコよくおわろうよ！）

I 女「それでもまた苦勞してホテル
を建てても一人もお客がこないの
でまた月全体に大きなホテルを建て
てしまいました。そうしたら人間が
間といってもまだできそこないで全
然もってきませんでした。」

声（カツコよくおわろうよ、H君にあて
て言つてたよ、またこわしちゃうつ）

H 男「それからね、三日たったら水
星がとんできました。ハレー水星で
ね、月にぶつかって爆発してしま
いました。それで終わり。」

声（だめだよ）

H 男「それでまた天国にいつてまた
生きかえりました。赤ん坊で生きか
えったので、大人になったらこじき
を始めました。」

B 男「寺（O君のこと）の言ったこと
は嘘で、えーと爆発したらホテルに
その主人はいたので月だけ爆発した
らさ、ホテルは空気がないから浮か
んで、そのまま死んじゃった。」

附録

一、口述と筆記とにお
けるつなぎ話の連想
の異同・その結果

○最初の話の印象の差異がのち／＼
の連想を制約する。

○初印象の明確化を図ることのため
に連想する。

筆記のつなぎ話の場合に、最初に
示した例文は

「むかしむかし、日本のきたぐ
にの山に、そこなしのふかいほ
らあながありました。というの
は、このほらあなは、まほうの
ほらあなであったからです。山
のふもとの人たちが、このほら
あなのいり口に立つてねがいご
とすると、きつと、ねがいが、き
きとどけられました。」

であったが、子供たちが強く印象を
受けたのは、そこなしのほらあな、
まほうのほらあなというところで、
どのグループのつなぎ話の中にも印
象の後がずっと尾を引いてゆく。そ
こなしから探検へと結びつき、不思
議な事件・恐怖と動かし、まほうか
らねがいごと、幸・不幸にいくとい
ったように。

「まほうのほらあな」の場合はつなぎ話の話題が、先の「月の世界」の時とは違って予想していたほうへと向いていったようだが、すなわち、先に奇抜だと感じたようなものは出てきていない。これは単に口述と筆記による差違ではなく、強く印象づけられたものによって連想がある範囲に限定されていくためと思われる。

「月の世界」の話においては月と地球の二地間に印象が向けられていたために、その往復がくりかえされながら連想が前進して行つて他の地点に寄り道しないが、月における出来事に対しては「月の世界」という限定はあまり受けていないように思われる。

それと同様に「まほうのほらあな」の話では、まほうやそこなしのほらあなということに対してひきずられてゆくために、この時までに築かれましたまほうだとかふかいほらあなに對する意識だとか感情・見方といったものに、まず連想の範囲に對して自らが制限を加えていってしまい、その他の面においては何を持ち出しでも平気だが、ことこの面においてはこうなるべきだと無意識の内にも考えてしまっている。どの話においても次々につなげていく際に常に自

由でどこにでもすぐ拡がってゆく連想がなされるわけではなく、最初の話によって受けた印象の差違によって次の連想というものが限定を受ける点、限定されない点が違ってくるのではなからうか。いかに目まぐるしく話がかわつてゆこうとも、どんなものが出てこようと、逆に動きのとまったようなつなぎ話でも奇抜さを許された面だからその話ができる。まためちゃん動きを許さない面だと思ふから自らに制限を与えてしまっているというように。

連想の明確性

また、これは口述と筆記との差違なのか、それとも最初の話の差違なのか、それとも連想そのものの性質のようなのかははっきりしないけれども、子供たちが話をつなげていく際に、その時々々の場面をはっきりさせていこうとしているように思える。たとえば

「ほらあなにはいったら八本の道があり……左から三ばん目の道をえらんだ」

とか、たんけんして

「三か月もたったけどおわりはあ

りませんでした。三十人のうちつぎ死んでもう十人に……」

眼前に八本の道が浮かぶ、どれを選ぼうか、こんなに歩き続けたのにまだ道は続いているが、人はどんな死んでゆく。一つの場面を的確にしながら、そのうえで次の場面へと移り変わってゆくことができる。連想を階段のようなものにたとえるなら、やはり、一段ずつふんでゆくのであって、急に二、三段ふみとばすといったようなものはあまり見られないような気がする。いま出した例は二つとも一人の話で、前につなげているものではないが、前のつなぎ話に話をつなげようとする時に何を考えるのだろうか。ほらあなの中で手りゅうだんをこうもりに向かつてなげつけ、ドカーンということばで終わると、「でも五十メートルはずれた」とつなぐ。また、ほらあなで何ものかに追われて入り口に向かつて逃げると、入り口は突然しまるという話には「よこの石が動いているのを見つけた。石がくずれてあながつぶいていた」として話が進むことができるようにもつていこうとする。

爆発でせつかくのほらあながこわれては大変と、でも五十メートルも離れた。広いんだよ。今までいわば道

が直線的につづいてきていたものを縦の方向がたれた時、横の広がりというものに目を向けていこうとする。いわば今まで話が進んできた方向というものを変えようとする考え方、いくつかの条件を出していくなどしていく中にこの話をどう続けていくのか、ここまで窮地に追い込まれてきたが、どうすれば切り抜けられるだろうかというような思考が見いだされるように思う。そしてこの思考はやはりひとつとびに移っていくのでなくて一つ一つの状態をふんで進んでいくように思われる。

(町田第五小学校教諭)

